

オーラルとエクリの^{あわい}間

——近世期ヨーロッパの「個人の語り」とその変容¹⁾

長谷川まゆ帆

人は「話す動物」²⁾である。言葉を通じて感じ考えるとともに、言葉を通じて何かを他者に伝えようとする生き物でもある。近世期のヨーロッパは、この言葉を通じて話し伝える人間の様態にいまだかつてない変化をもたらされた時代である。その大きな契機となったのは、活版印刷の技術の発明である。初期には^{インキュナビュラ}incunabula(揺籃期本)すなわち写本と見まがうばかりの手の込んだ高価な木版活字本が主流であったが、16世紀前半の^{フルークシュリフト}とくに1516～1546年のドイツではFlugschrift(ビラ・小冊子)³⁾や^{ポリティッシュ・クラインビュブリカティオン}Politische Kleinpublikation(政治的小出版物)が大量に出回り、それが宗教改革に多大な影響を及ぼしたと言われている。この時期以降、ロゴスをもつ人間の「話し伝える」様態に、何がしかの変化が生じていたことは誰しもが認めるところである。しかしながらこの変化をより仔細にとらえたいと思うとき、近世期の300年ほどの間に起きていた変化とは、はたしていかなるものであったのか。

第1節 エクリとオーラルの出会いと交錯

活版印刷の技術の普及によってもたらされたものは、まずはエクリ écrit すなわち「書かれたもの」の複写の速度が飛躍的に高まり、手で書き写すしかなかった時代に比べ、同じエクリが短時間に大量に生産されるようになったことである。それ以前から、中世都市の発展につれて写本の生産は驚くほど分業化され、想像以上に効率よく速くなされるようにはなっていたが、活版印刷による出版の量と速度は、それをはるかに凌駕して進んだ。効率の良い量産が可能になることで、販路も広がり、ひとつのエクリがより速くいっそう遠くにまで運ばれるようになったのである。

また初期には写本など既存のエクリを印刷することに中心があったとしても、やがて最初から出版を意識した新しいエクリも生み出されていった。エクリの種類は増えていき、それまでエクリに触れることのなかった人々にも「読むこと」や「書くこと」を促した。一方、エクリは、そもそも写本の時代にもそうであったように、通常は「黙読」ではなく声に出して複数の人間の間で読まれたのであり、目で読むだけでなく耳で聞くものであった。印刷術が普及してもこうした習慣は続いていたから、エクリの種類と量

の増大によって、エクリを耳から聞く人々の数も増えていった。同時に、集団で声に出して読むことによってコミュニケーションや対話も広がり、内容に意見を述べたり、批評したり、解釈したり、論難しては討論する機会も増えていった。エクリが容易に手に入るなら、そのための集いやサークルも自ずと生まれてくるからである⁴⁾。

他方、この時代には依然として、多くのエクリが手で書き写されてもいた。発話された言葉を聞き取って手で紙に書きとめることも頻繁に行われていた。世俗国家の統治機構が整えられ、文書行政が発達していくにつれ、平民の間でもさまざまな証書や契約書が必要となり、代訴人や公証人、代筆屋の役割は、むしろこの時代にますます大きくなっていったのである。「読むこと」や「書くこと」は次第に日常のなかにも浸透していき、17世紀以降は郵便網の発達に伴い、書簡のやりとりもさかんになっていく。いわゆる「書簡の時代」がやってくるのである。覚書や日記、自伝の類もいたるところで書かれるようになる。要するに、印刷物と活字の広がり、手書きの文書を衰退させるどころか、むしろ逆に「書くこと」そのものを促し、活字であれ、手書きであれ、エクリと「読み書き」そのものを次第に増大させていったのである。

一方、歴史家でありイエズス会士でもあったミッシェル・ド・セルトー（1925-1986）は、この時代のエクリの増大と「書く」営みの広がり注目して、次のような言葉を残している。書くこと *écrire* は、「近代の神話的な実践 *pratique mythique moderne*」⁵⁾ であると。セルトーからみれば、近世は、〈神の言葉 *Parole* ^{パロール}〉が聞こえなくなり、その声がゆがめられ消えてしまったと感じられるようになっていく時代である。16～18世紀に解釈学がさかんになり、そのための解釈秩序が発達していくのも、神の言葉の消失に伴い、その代替物としてのエクリがますます必要とされ受容されていくからに他ならない。こうした理解は神学者でもあったセルトーならではのものであるが、それにもかかわらずこの言葉は、ヨーロッパの近世期に生じていた変化の一端を深く言いあてている。

近代初期のオランダ人ユマニスト、エラスムス（1469頃-1536）は、こうした変化の始まりに生きた証人であり、かつその当事者でもあった。エラスムスは、周知のように、慎ましい平民の女にも聖書が読まれるようにと願い、聖書がラテン語だけではなく、それぞれの地域の言葉に訳されていくことを強く望んでいた普遍神学の主唱者である⁶⁾。彼は晩年の著作『対話集』（1518-1533）において、説教の重要性を伝えるのに、ある登場人物の一人に次のように語らせている。「書かれたものからわたくしが、クリュソストモスだとかヒエロニムスが話しているのを耳で聞いたのだとすれば、説教というものが全く聞けなくなったとは、わたくしには思えないのです *Il me semble que je n'ai pas été tout à fait privé de sermon, si j'ai écouté Chrysostome ou Jérôme parler par écrit*⁷⁾」と。エラスムスにとって、エクリとして今この手元にある説教集は、単なる書物ではなかった。それは千年の歳月を超えて届けられた教父たちの言葉であり、それらを「耳に聞こえる」よう甦えらせてくれる聖なる楽器、すなわち消えてしまった言葉や祈りを再現させてくれる

かけがえのない呪具でもあった。

こうしたエクリとオーラルの抜き差しならない関係は、ではその後の時代には衰退していったのかと言えば、そうではなかった。たとえば、1639年に大西洋を渡りカナダに初のウルスラ会女子修道院を開いたマリ・ギヤール〔受肉のマリ〕(1599-1672)もこうした間^{あわい}を生きたひとりである。マリは平民であったが、若い頃から聖書に親しみ、霊的なものに強く惹きつけられていた。早くに寡婦となり親戚の荷馬車屋を手伝いながら、残された息子を懸命に育てていくが、霊的なものへの憧れは捨てきれず、あるとき偶然に出会ったフィアン会派の神父に「書くこと」を勧められる。以来マリは日々心に浮かぶことをノートに書きだすようになり、自己の内面を見つめることで神との対話を深めていく。そして彼女の人生はまさにここから大きく展開していくことになる。その生涯はこの時代の平民の女の一生としてはやや例外的であるが、決して特異なものではなかった。そこにあるのは「神の言葉」を「読み」かつ「聞く」という体験であり、自己への省察が神との対話と重なり合う経験である。その背景には、一方には印刷物の増加と平民の識字能力の向上という変化があり、他方には、カトリックの改革運動の中で女にも世俗を離れて神に奉仕する道が次第に開かれつつあった17世紀前半の諸都市の新しい動きがある。マリは *le vouloir-dire* すなわち「神の言わんとすること」を発話された言葉として身体で受けとめ、感じ取っていたのである。

マリのような存在は特殊17世紀的なものであったかもしれない。しかし「エクリから声として言葉を聞く」そのあり方は、印刷物の普及や識字率の増加により巷に活字があふれても、読める者の数が増えていっても、決して消失することはなかった。それはオーラルな伝統がまずあって、そこにエクリが接合されていくときに生じる現象である。時代が下り18世紀になると、印刷された書物や文字はますます普及し、都市でも農村でも聖書に限らず活字がはるかに身近なものになっていくが、このオーラルに根ざした身体のハビツスは、その時期にも依然として消失することはなかった。革命期に至っても、エクリは「声を出して *à haute voix*」読まれていたのであり、フランスでは識字率の平均値が依然として40% (男性) を割っていたとしても、その壁を乗り越えて、エクリは想像以上に多くの人々の耳に届けられていた。オーラルとエクリは互いに境を接し、不断に影響を及ぼしあい浸透しあっていたのであり、このあり方はその後も長く生き続けた。

では、そうした出会いと接触の中で、話し伝える生き物である人間の「語り」や伝達の仕方はどのようにおし広げられ、変化させられていったのか。その変化は、少なくともオーラルの衰退、あるいはオーラルからエクリへの「移行」という単純な置換の歴史としてはとらえられない。この変化をより詳細にみていくとき、オーラルとエクリはどのように関係しあっていたのか。以下では、近世期ヨーロッパの事例をとりあげながら、この時代のオーラルとエクリの間^{あわい}に分け入り、この両者の出会いと融合が近世期の「個人の語り」すなわち「話し伝えようとする生き物」の様態にどのような影響を及ぼして

いったかを考えてみたい。

ただしここで「個人の語り」と言うとき、それは今日思い浮かべるような個人の語りと同じではない。この時代には、いったい何が「個人の語り」なのか、それが、まずもって問題になるからである。それゆえ以下第2節においては近世期の「個人の語り」とは何かについて簡単に整理しておきたい。その上で続く二つの節で、この時代のいくつかの叙述をとりあげ、その叙述におけるオーラルとエクリの関わりを検討してみよう。

ここで事例としてとりあげるのは、残念ながら紙幅の都合もありほんの数例である。ひとつはギンズブルグ(1532-1601)の『チーズとうじ虫』⁸⁾で知られるメノッキオのカオスについての語りである。彼の語る「カオス」には謎が多いが、それがどこからやってきたものであるかをあらためて考えてみることで、メノッキオのエクリとの接触、読書の様態がいかなるものであったかを考察してみよう(第3節)。もう一つは近世期に現れる「火事」を描いた叙述である。ささやかではあるが、そのいくつかをとりあげ、比較を試みる。たとえば、あるブルブルゴーニュの小教区司祭の火事を伝える書簡やセヴィニエ夫人(1626-1696)の『書簡』、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ(1734-1806)の自伝小説『ニコラ氏』(1794-97)などに見られる「火事」についての記述である。それらの語り方、叙述の運びを比較検討し、こうした書簡や小説の叙述の中でオーラルとエクリがどのように出会い、絡み合い、影響を及ぼしあっていたかを考えてみよう(第4節)。

第2節 近世における「個人の語り」とは何か

近代及び現代において「個人の語り」と言うとき、そこには、「公的な語り」と「私的な語り」、「社会」や「共同体」と「個人」という二項対立的な分類、裁断が可能であるという前提がある。「個人の語り」とはそのうちの専ら私的な、個人的なことについての語りであり、公的なものとははっきりと区別される内容が存在し、それが表出されたものであると理解されている。しかし近世期にはこうした公と私の区別はなお曖昧であった。「個人の語り」は同時に「公の語り」でもあり、また「公の語り」は「個人の語り」でもあったからである。たとえば国王諮問会議 Conseil d'Etat は、正式にはその後ろに *privé du roi* をつけて表記される。つまり「王の私的な国务会議」というのが正式名称なのである。一国の最高議決機関が国王の恣意的な裁決の場でもあるということは、現代の法治国家に生きる我々にはにわかには理解しがたい。しかし逆に言えば、王の「私」は「公」でもあり、王には「個」も「私」も存在しないということを意味する。ここにこの時代の特徴、公と私の区別の曖昧さが象徴的に表れている。

こうしたことは公文書の扱いにも表れている。この時代には、中央の財務総監や国务卿は、地方長官補佐の行政官である地方長官や地方総督あるいは高等法院長らに指令を発し、彼らから報告を受けることを日常的に行っていたが、これらの文章は書簡の形を

とることが多かった。リシュリユー文書、マザラン文書、コルベール文書などにはこうした書簡が多く含まれている。これらは国務に関わる内容を持ち、今で言えば公文書にあたるが、この時代には、職務を辞する際にこうした文書も個人の所有に属するものとみなし、個人の邸宅に持ち去ってしまうのが慣例であった。それらは私物として代々その家の家産として保管され、相続されていた。コルベール文書などはそのよい例である。それは没後半世紀たった1732年に孫の代にやっとその一部が売却され国王図書館の保管となる。その中には、王国の直接税であるタイユに関係する文書を含め、職務上コルベールが手中にしていた公文書が多数含まれていた。ちなみにこの売却からは膨大な書簡類が除かれており、その後も家伝の文書として保存され、革命期になって初めて亡命貴族の財産の一部として政府に没収されたという。大法官セギエの書簡も没後は個人の財産として受け継がれていき、これも孫の代になってようやくサン・ジェルマン・デブレのベネジクト会派の図書館に譲渡されている⁹⁾。

国務とは異なる文献にも、こうした両義性、曖昧さは付きまとう。たとえば「恩赦嘆願状」しかり。これは情状酌量により刑の軽減を国王に求めた文書であり、すでに刑を宣告された罪人がいかに自分の犯した罪がやむを得ない正当防衛であったかを説明することで、国王に罪の軽減を願い出るために作成された文書である。罪人が口頭で語る言葉を代訴人が聞き取り、文書化したものである。もともとは発話された声、それが聞き取りによって文字にまとめられ、嘆願書となり、公の場に持ち込まれる。これは、王権の制度に則って作成された文書であるから、今で言えば公文書にあたる。しかしそこでは罪人自身が過去を振り返り、自らの主観を駆使して、より説得的に、つまりより有利な判断が導かれるよう読み手を意識しながら、創造的に自分を語っていく。そこにはしばしば個々の罪人の機知や機転、ユーモアさえもが織り込まれている¹⁰⁾。

さらに時代は下って、18世紀になっても、そうした両義性を示す事例は豊富にある。たとえばロバート・ダントンが『猫の大虐殺』の中でとりあげているデムリ警部の調査書がその格好の例である。警部デムリは、1748-1753年の5年間にパリの高名な啓蒙思想家から無名の三流文士にいたる著述家たちの動静を追い、500件にのぼる調査書を残したが、これは治安維持のために作成された警察史料でもある。しかしそこには個々の作家について、たとえば「彼はまずまずの散文を書くが、詩作は彼の手に負えない」とか「彼の詩には多少の才が伺われるが、散文ははなはだ蕪雑で気品に乏しい」などと述べ、警部の個人的な作品批評までが書き込まれている¹¹⁾。読書好きの警部は、監視を任務としながら、いつのまにか作品を批評する読者の一人となっているが、そのことに矛盾を感じている様子はない。一方これは1780年代の事例であるが、アルザスのある在地の役人は、国王の直轄官僚である地方長官の依頼に応じて地域の状況を報告する任務上の書簡の中で、地域社会の事情を正確に調べて伝えるというよりも、自らもその利害の当事者であるという両義的立場のゆえに、周囲の状況を驚き狼狽しながら眺め、

その結果、その判断には固有の利害や思い込み込が紛れ込む¹²⁾。

要するに、この時代には、公文書に属すると考えられるテキストの中に、個人的解釈や主観的判断と思われるものが織り込まれているのであり、個人の主観や判断、かけひきの痕跡が十分自覚されないまま表出されているのである。その場合、どこまでが個人に固有のものなのか、どこからが公のものであるかは、単純には線がひけない。この時代にはそもそも「公」と「私」の境界線は曖昧であり、入り組み、想像以上に重なりあっていたからである。

もちろん近世期と一口に言っても、300年近い間には変化もみられた。あらためて整理してみると、時間的には大きく三つに分けられる。一つは宗教改革期であり、活版印刷の技術の発明により印刷物がかつてない速度と規模で流通し始める16世紀である。この時期には、メノッキオに加えて、たとえばラブレール(1483-1553)やモンテーニュ(1533-1592)らの営みが浮かんでくる。次の17世紀は、郵便網の整備と移動の拡大、書簡の増大に特徴づけられる時代である。たとえばゲ・ド・バルザック(1597-1654)や、先にあげた受肉のマリ(1599-1672)に加え、彼女が伝道に渡ったケベックの森で出会ったヒューロンの女すなわち「その部族内で最長老でありかつもっとも高貴な者たちの一人」の語り¹³⁾も現れる。また本稿でもとりあげるセヴィニエ夫人(1626-1696)の書簡や、今触れた恩赦嘆願状もオーラルとエクリの関わりについての、考察対象となりうる。

次の18世紀は、識字率の上昇と活字および書き手のさらなる増加、書簡小説の時代の到来に特徴づけられるが、この時代になると、こうした分析に利用できる事例はさらに豊富になってくる。たとえばガラス職人メネトラの日記やすでに触れたたデメリ警部の調査書(1748-53)、そして印刷職人コンタの残した逸話に描かれた「猫の大虐殺」(1762)など。さらには、貧しい車大工の倅でありながら、放浪の末に隠者から読み書きを覚え、やがて再建中のロレーヌ・エ・バール公国のレオポール公の息子の養育係と出会い、ついには歴史・古代文明の教授にまで出世していくヴァラント・ジャムレ・デュヴァル(1697-1775)の自伝もあげられる。

時間による変化は重要である。エクリのかたちはこの時代にも変化していたからである。とくに啓蒙期に近づけば近づくほど公私の区分は明確になり、「男」と「女」や「大人」と「子ども」の違いなどさまざまな境界線が、まさに書簡や小説、科学や哲学の言説、図像の流通などによって次第に鮮明に浮かび上がっていく。その過程でオーラルとエクリの境界も揺れ動き、かたちそのものが変化していったと考えられる。

第3節 メノッキオの語りの世界

さて、先を急ごう。最初にとりあげる対象はメノッキオの語りである。カルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』は日本でもかなり前に翻訳が出ていて、比較的よく読ま

れてきた書物の一つである。それゆえメノッキオについて知る人は少なくない。しかしながら、彼の宇宙発生論 cosmogonia [伊] consmogonie [仏]¹⁴⁾ は、当時の審問官たちのみならず、わたしたちにとっても難解であり、何度読み返しても最後まで解読不能な部分が残る。彼の「語り」はそもそもどこからやってきたのか。

北イタリアフリウーリ地方の一介の粉挽屋ドメニコ・スカンデッラ、通称メノッキオ (1532-1601) は、妻と7人の子があり、最初の裁判の時52歳であった。裁判にも粉挽き屋の着る白のチョッキとマント、白麻の帽子を身に着けて現れたと言う。最初の審問の後、メノッキオはいったん釈放されている。しかし15年後、再び裁判にかけられ有罪となり、処刑される。彼は日ごろから書物を読み、話すのが好きで、自説には自信をもっており、法廷でもものおじひとつしなかった。

メノッキオの言葉は、16世後半に、二度にわたって異端審問所に引き出された一介の粉ひき屋の言葉である。審問官たちを前に語られたものであり、異端審問という特殊な権力関係のもとで表出されたその内容が、はたしてどれだけメノッキオの考えをまっすぐに表出しているかは疑問が残る¹⁵⁾。意図的に隠されたことがあるのではないかと思われるからである。実際、この記録は審問という場がもつ特殊な力関係を抜きには理解できない。方言で語ったであろう言葉が記録係によって整序されてしまったその文字記録から、メノッキオの息遣いや記されなかったことを知ることは難しい。しかし審問に際して語ったとして残されている文字記録からでも、その限りの限界の中ではあれ、メノッキオ自身の語りの一端をそれぞれのもので対象化することはできるだろう。

メノッキは時間があれば本を読んで過ごし、風車小屋に現れるだれかれかまわず議論をふっかけては自分の考えたことを他者に伝えようとしていた男である。人に話すことには慣れていたのでだろうか。メノッキオは裁判で審問官たちから問われると、それに随時応答していく。しかしその内容は当時のカトリック教会が前提としていた考え方とは非常に異なっていたために、しばしば審問者たちを当惑させ解読不能状態に至らしめる¹⁶⁾。しかしメノッキは狂っていたわけではない。そこには、後に見るように、不思議な一貫性があった。

彼は、審問の中でも、普段からそうしていたように、最初から「創世記」の物語とそれについての正統的解釈を退け、ためらうことなく原初の「カオス」の存在を主張している。たとえば、こんな具合である。

わたしの申し上げたのは、わたしが考え信じているところでは、すべてはカオスだということです。つまり大地、空気、水、火のすべてが混然一体となったものだという事です…… (2月7日)

«Io ho detto che, quanto al mio pensier et creder, tutto era un caos, cioè terra, aere, acqua et faco insieme....» (7 febbraio)¹⁷⁾

次の審問では、司教代理が、マンドヴィルの『旅行記 *les Voyages*』について語っているメノッキオに「その書物はカオスについては何も言っていないのか」*« se questo libro parlava niente del chaos »*¹⁸⁾と問い、メノッキオの話を中断するが、これに対して彼は、次のように答えている。

何も言っていない、猥下。カオスというのをわたしが見たのは『聖書の略術記』においてなのです。ただそれ以外のことでわたしがカオスについて言っていることは、わたしが自分の脳で作り上げたことなのです。

*« Signor no, ma questo l'ho visto nel Fioretto della Bibia; ma l'altre cose ch'io ho detto circa questo caos le[ho] formate da mio cervello »*¹⁹⁾

ところがギンズブルグがここに出てくる『聖書の略述記 *Fioretto della Bibia*』を実際に調べてみると、そこにはカオス *chaos* についての記述はどこにも見あたらない。『略述記』では、聖書にある天地創造の物語にも触れられているが、一貫性がなく、ほとんどがホノリウスの『諸事解明』からとってこられたものであり、一連の章が天地創造よりも先に置かれている。しかもそこでは、形而上学と占星術とが混ざり合い、神学が四元素の学説と一緒にくたになっている。つまり神は「無から創造」したという考えではなく、四元素の未分化な状態から引き出して、こしらえていったと解釈されている。それは聖書の語る天地創造の物語とはずいぶん異なる説明であるが、結局、ここにも「カオス」については何も書かれていない。

では、カオスという言葉はどこからやってきたのか。メノッキオはどこでこの言葉を知り、わがものとしたのか。ギンズブルグによると、この語は〈学問的な〉言葉であり、アウグスティヌス会士ヤコポ・フィリポ・フォレストィ『年代記補遺』(15世紀末)からとってきているのではないかと言う。フォレストィの本は世界の創造から始まっていて、フォレストィは自身の属する修道会の守護者聖アウグスティヌスを引用して次のように、述べている。

……そして、初めに神は天と地とを造られたと言われている。だが、天はこの時点から存在するのではない。天は潜在的に存在するものだからであり、天はその次につくられたと [アウグスティヌスの本には] 書かれているからである……(省略)……
« ...et é ditto, nel principio fece Iddio el cielo et la terra: non che questo guà fussi, ma perché essere potea, perché di poi se scrive esser fatto el cielo;

それゆえ未だ詳細な輪郭を欠いているこの空間的形は、オヴィディウスが次のように書くとき彼の語っているのはカオスである。《大地、海、それにすべてのものをおおう空が存する以前には、自然は全質量において同一のものである。哲学者たちは

この手の加えられていない原料をカオスと呼んでいる。そしてそれは同一圏内においてとりまとめられている不定形の動きのないひとつの塊りであり、うまく結び合わされていない諸物の不和をはらんだ種子である。

...Questa adunque spaciosa forma, che di certa figura mancava, Ovodio nostro nel principio del suo maggiore volume et anchora alcuni pilosophi Caos la chiamorono, de la qual cosa esso Ovidio in quel medesimo libro fa mentione dicendo: “La natura aventi che fusse la terra et lo mare et il cielo che copre il tutto, havea un vulto in tutto il suo circuito, il quale li philosophi chiamorono Caos, grossa et undigesta materia: et non era se non un peso incerto et pegro, et radunata in quel medesimo circulo, et semi discordanti delle cosa non bene congiunti” »²⁰⁾

つまりフォレストィは、聖書とオヴィディウスとを近づけようという考えから出発して聖書的というよりもオヴィディウスの宇宙発生論 *cosmogonia* を開陳しているのである。ギンズブルグが述べているように、メノッキオが、原初のカオスを意味する「手の加えられていない物質」という観念に強い印象を与えられ、それに思いを巡らしていくうちにこうした考えを抱くにいたったという推測も十分成り立つ。

しかし、メノッキオはあくまで「カオスについてわたしが言っていることを除けば、わたしが自分の脳で作りに上げたことなのです」と述べているのであり、「これらのこと」をこそメノッキオはかれの住む村の隣人たちにも語り伝えようとしていた。たとえば証言者の一人として召喚されたジョヴァンニ・ポヴァレドは、伝聞であることを断った上で「一週間前にボルドノネの市に行く徒上を歩きながら、メノッキオと話したことの別のある友人から聞いた話だとして」くりかえしこう語っている

この世の初めには何も存在せず、海の水が叩かれて泡立ち、その泡はチーズのように凝固したのだ。ついでそこから無数のうじ虫が生じてきて、これらのうじ虫は人間となった。そのなかで最も強力にして最も賢いものが神であり、神にたいして他の者たちは服従を誓ったのだ、という話を「メノッキオと話したことの友人から」聞いたことがあります。

*«Io gli ho inteso a dir, che nel principio questo mondo era niente, et che dall’acqua del mare fu batuto como una spuma, et si coagulò come un formaggio, dal quale poi nacque gran multitudi-
tudine di vermi, et questi vermi diventorno homini, delli quali il più potente et sapiente fu Iddio, alquale gl’altri resero obedientia....»*²¹⁾

この証言は伝聞であるためか、メノッキオが第一回の審理を通じてしていた説明とは少し異なっている。彼が第一回に語っていたのは、次のような内容である。

わたしの申し上げたのは、わたしが考え信じているところによれば、すべてはカオスだということです。そしてこのかさのある物質はちょうど牛乳の中でチーズができるように少しづつ塊になっていき、そこにうじ虫があらわれ、それらは天使たちになっていったということなのです、そして至上の聖なるお方は、それが神と天使であることを望まれたということです。これらの天使たちのうちには、同時にこの塊からつくられた神も存在していました。

«Io ho detto che quanto al mio pensier et creder, tutto era un caos...et quell volume andando così fece una massa, aponto come si fa il formazo nel latte, et in quel deventorno vermi. Et quelli furno li angeli; et la santissima maestà volse che quell fosse Dio et li angeli; et tra quell numero de angeli ve era ancho Dio creato anchora lui da quella massa in quel medesimo tempo....»²²⁾

隣人たちの証言にはなぜか「カオス」という語が全く出てこない。伝聞によって口から口へと伝わるうちに、メノッキオの話は単純化されてしまい、結局、証言者の口にはぼってきたときには、いつの間にか「カオス」という馴染みのない言葉は姿を消し、よりオーソドックスな別の言葉に置きかえられている。しかしメノッキオの話の中では、カオスという言葉は常に重要なタームであって、必ずもち出される。そしてカオスという言葉を用いて構成された彼の考えの主要な骨格が、話していくうちに変化することはない。

一方、上記の説明に対し司教代理が「この聖なるお方とは誰なのだ *Che cosa era questa santissima maestà?*」と問うたときには、メノッキオは「非常に聖なるお方というのは、神の精神であり、常に存在しているものだ」とわたしは理解しています «*Io intend che quella santissima maestà fusse il spirit de Dio, che fu sempre*»²³⁾と説明し、カオスにたいする神の先行性については、以下のようにも語っている。

この神はカオスの中で、ちょうど水の中においてそこから出たがっている人のように、あるいは木の幹の中にあって、そこから抜け出たがっている人のような具合に、存在していたのです。同じように、この知性は、知識をもっていたので、この世を創造しようとして、そこから抜け出たがっていたのです。

«*Questo Iddio era nel caos come uni che sta ne l'aqua si vuol slargare, et come yno che sta in un boscho si vuol slargare: così questo intelletto havendo cognosciuto si vol slargare per far questo mondo*»²⁴⁾

それにたいして審問官が、そうすると「神は永遠であり、つねにカオスとともに存在していたというのか *Iddio è stato eterno et sempare con il caos?*」と問うと、「それらはいつ

も一緒になっていましたし、決して分離していたことはないとわたしは信じています。神なしにはカオスもないし、カオスなしには神はないと、わたしはそう言いたいのです *Io credo che sempre siano stati assieme, né mai siano stati separate, cioè il caos senza Iddio. né Iddio senza il caos*」と応答している²⁵⁾。

この確信に満ちた、しかしなんとも言い難い悠々たる知識を前に、審問官たちはひどく困惑してしまう。彼らは裁判を最終的に終結させるのに少しでも話を明瞭にしようとあれこれの問いを発し、納得できる説明をメノッキオから引き出そうと試みるが、審問官たちに理解可能な説明を彼の語りから見い出すことはできない。理解できないものを有罪にすることはできない。だからこそメノッキオはいったん釈放されているのである。メノッキオの脳内にあったのは、天使がチーズ及びチーズから湧くうじ虫から生まれてくる、つまりはうじ虫こそ天使であるという考えである。しかし審問官たちにしてみれば、これはどうして理解しがたい荒唐無稽な代物なのである。メノッキオの語りはこうした日常的な比喩に満ちており、それゆえにか、その語りにはとってつけたような唐突さや不整合性はない。それは、つまるところ神的存在者に世界の創造を記させることを拒否する考えでもある。

ではメノッキオは、このチーズとうじ虫との関係については、いったいどこからヒントを得ていたのか。ギンズブルグはダンテの『神曲』(「煉獄篇」、十章、124-125)の中にある一節「知らずや人は、天界の蝶を作らんとて生まれしうじ虫になることを」に言及し、その影響について吟味しているが、最終的には、メノッキオがこのカオスに関わる奇妙な宇宙発生論を引っぱり出してきたのは書物そのものからではないと結論づけている。そしてギンズブルグは、「それは純粹かつ素朴な類比による説明であり、カビが生じてチーズの中にうじ虫が生まれるという日々目にして光景からである。彼にとって、生命の誕生を説明するのに、神の介入はいらない。カオスつまり“生の未分化な物質”から、最初の最も完全なものである天使が誕生するからである」²⁶⁾と。

しかし、ではこれらの物語はメノッキオの日常的体験に立ち返れば、それだけですべて説明できるのかと言えば、そうでもない。ギンズブルグは、そこでさらに『ヴェーダ』という古いはるかなインドの神話の中で、宇宙の起源は牛乳の凝固と似ていて、原初の海水が創造者である神々によってたたかれて凝固することから生じ、次いでそこから無数のうじが生まれたと説明されていることを指摘する。またインドのカムルク族がする説明とも符号することにも言及し、それは「古い伝統のこだま」と説明する。しかしそれも説得力をもちえないことをギンズブルグは承知している。それゆえ今度は、世代から世代へとオーラルになされてきた伝達、直接的な伝達によるものなのかとも問う。つまりギンズブルグも、ここまで掘り下げてきてなお、彼自身が困惑を隠せないしているのである。メノッキオの世界に降りて行けばいくほど、出所についてはますます曖昧になり、わからなくなってしまうのである。ギンズブルグは、苦し紛れに、この地域

に見られるベナンダンティの儀式、シャーマニクな文化の広まりを考えると、これは決して信じがたいものではないとも書き添えている。

ギンズブルグは、最終的には「伝播による広がり」という仮説に立つが、彼によると、メノッキオの宇宙発生論 *cosmogonia* が組み込まれているのは、「こうした文化のかかわりあいや回遊 [移動] という、依然としてほとんど開拓されていない領域の上にある *È su questo terreno ancora quasi inesplorato di rapport e migrazioni culturali che s'innesta la cosmogonia di Menocchio.*」²⁷⁾ と述べ、さらにはメノッキオが創造者たる神の存在を認めていないことや、メノッキオの「大工、樵人、壁屋」という社会的な階層を根拠に、メノッキオの思考の中には唯物論的なヴィジョンがありうるとまで言う。しかしこのチーズとうじ虫の観察から天使の創造へと思いつく発想に「唯物論的なヴィジョン」を見るのはどう考えても読み込みすぎである。しかもそれによって語としての「カオス」の出所が突き止められたのかと言えば、否である。

メノッキオはもしかすると、審問というこの特殊な権力関係の中で、カオスの出所については意図的に隠していたのかもしれない。その可能性がないとは言えない。しかし、メノッキの書物との関わりを考えると、彼は風車番をしながら借地での細々とした農業に従事する傍ら、時間があれば書物を読み、人が訪れれば、自説を話して聞かせていただけの、どこにでもいそうな男のようにも見える。彼はたしかに読み書きができたし、村役に選ばれるほどには周囲の信頼も得ていたが、それもそれほど特異なことではない。

彼のエクリとの関わりを考えると、特筆すべきことは、彼が書物で読んだ文字や文章から何かをただ正確に受け取り、記憶していたわけではなかったということである。書物が言わんとしている主張やメッセージを一字一句たがわず正しく理解したり、吸収しようとしていたのでは必ずしもなかったのである。メノッキオは、必要に応じて自由に言葉や文章をゆがめ、あれこれの異なる文章を勝手に関連付けながら読んでいた。ギンズブルグの表現を借りれば「恐ろしいアナロジーをもあふれさせながら、まさに言葉を文脈からもぎとって考えていた」のである。現代なら、それは「間違った読み」「誤読」として一笑に付されるような読みである。しかしメノッキオはそれを間違ったものとは思わず、「自分の脳」で自由に解釈していたのである。しかも読みながら彼は、そのたびに、日ごろ読書しながらよくわからないと思っていた箇所に分りなりの仮説をたて、独自の解釈や意味を見いだしながら、まさに己の思考回路を駆使して読んでいたのである。

こうした「読書」から言えるのは、メノッキが何らかの異端とされる集団に属していたわけではないということ、一つの決められた読みを優位に置き、読みを固定させようとする特定の人物や力から自由な位置にあっただろうことである。メノッキオは、当時あったあれこれのイデオロギーに心酔していたわけではないし、既存の諸権力から受け入れられ評価されることを少しも求めてはいなかった。つまりメノッキオは、予め打ち立てられているモデルや規範、読者共同体の外側に位置していたのである。しかし彼が

世界から全く超越して、時間や空間からも切り離されていたのかと言えば、そうではないだろう。大きな文脈としては、メノッキオもまたこの16世紀半ばのイタリアの思潮、すなわち人文主義と宗教改革の生み出していた新しい時代の流れの中にいた。たしかにメノッキオの主張は、人を非常に当惑させるものであったし、当時よく読まれていたマンドヴィルの『旅行記』や『ジュディッチオの物語』といった、後から読めば全く無害に思われるような古いテキストからも深く影響されていた。200年も前にキリスト教を批判して書かれたマンドヴィルの『旅行記』から、彼は自分の生きる16世紀の当時支配的であった教会の考えとは異なる思考の可能性を読み取ってもいた。彼は、読書から得た言葉や内容を自分の生きている時代の現実と重ねあわせ、当時のイタリアの正統的な教会の解釈とは異なる見方を導き出していたのである。メノッキオは、限りある時間と空間の中で、しかし新旧のエクリと出会うことで、言葉を切りとり、咀嚼し、自家薬籠中の物語を、まさに創造的に練り上げていたのである。

最後にもう一度メノッキオの「これらのことは、わたしが自分の脳で作上げたことなのです」という言葉を思い出そう。メノッキオの「脳」の中で何が起きていたのか、わたしたちがほんとうに知りたいのはそこである。書かれた頁とオーラルな体験とが出会う場所、彼の脳は、メノッキオなりの化学反応を引き起こしていたのであり、前代未聞の宇宙発生論へとメノッキオを導いていった。ギンズブルグの表現を借りれば、メノッキオの脳はこうした諸要素の融合からまさに「爆発性の混合物 *una miscela esplosiva*」²⁸⁾を作り出していたのである。ちなみにこの *esplosiva* [explosive] には「危険な」という訳語をあてることもできる。

第4節 火事を語る

さて、時代は下り、今度は、災害、それも火事の叙述である。火事は、この時代には都市でも農村でもたいへん恐れられていた。なぜならいったん火事が起これば、消化が難しく、密集した家屋なら火は次々と燃え移り、集落や街区を短時間のうちに焼き尽してしまうからである。何もかもが失われる。しかしこの当時、火事が起きることは決して珍しいことではなかった。誰もが生涯に何度か火事に遭遇し、その恐怖を目の当たりにしていたからである。いわゆる消防団の設置は遅く、パリに消防団が設置されるのは、1699年のことである。それまでは宗教教団や僧侶たちのヴォランテニアによって火消しのための救援が行われていた。火事は洪水や地震と同様、人間にとってはなすすべのない天災と同じであり、そのせいか火事を語る叙述はまれである。仮にあっても火事そのものの光景よりは、それによってどのような被害が生じたかに関心が注がれてきた。

*Je soussigné Curé de Beynes Diocèse
d'Auxerre certifie que le douzième jour
du mois de mars de cette présente année
mil sept cent soixante et une, est arrivée
une incendie qui a consumé dans ma
paroisse neuf bâtiments, et la plus grande
partie des effets mobiliers, qu'on n'a pu
sauver; Le feu aiant fait les progrès les
plus rapides, parceque tout les habitants
estoit à cette heure occupés aux travaux
de la campagne, ce qui a été cause que deux
enfants ont été brûlés; qu'ainsi ces malheureux
incendies sont réduits à une déplorable misère
et ont besoin de prompts secours de l'assistance
des fidèles. enfin de ce que tout dessus j'ai
delivré le présent certificat. A Auxerre
Le seizième Mars mil sept cent soixante et
une. Frappier Curé*

*Je soussigné Curé de Beynes Diocèse
d'Auxerre certifie que le douzième
jour du mois de mars de cette
présente année mil sept cent
soixante et une, est arrivée une
incendie qui a consumé dans ma
paroisse neuf bâtiments, et la plus
grande partie des effets mobiliers,
que on n'a pu sauver, le feu aiant
fait les progrès les plus rapides, parce
que tous les habitants étoient à cette
heure occupés aux travaux de la
campagne ce qui a été cause que
deux enfants ont été brûlés; qu'ainsi
ces malheureux incendies sont
reduits à une déplorable misère et
ont besoin du prompts secours de la
charité des fidèles, enfin de ce que
tout dessus j'ai delivré le présent
certificat. À auxerre le seizième
mars mil sept cent soixante et une.
Frappier curé*

(和 訳)

わたくし以下に署名をいたしましたオセールの司教管区のベンヌの司祭が、以下のことを証明させていたできます。すなわち1761年3月12日に、わが小教区におきまして火事が起き、9つの建物と家財道具の大部分が焼き尽くされました。火の回りが非常に速く、それらを持ち出すことができませんでした。といいますのも、その時分には、いずれの住民もみな畑仕事に従事していたからです。子どもが二人、火傷を負うことになったのもそれが原因でございました。このようなわけですので、焼け出されたこの不運な人たちは、破滅的な境遇に追いやられていまして、信者たちからの施しによる迅速な救援を必要としています。それゆえ結局、以上のことすべてについてこの証明書をお届けすることが必要となったのでございます。オセールにて、1761年3月16日。司祭フラッピエル

(長谷川まゆ帆 訳)

(1) ベンヌの司祭の書簡

最初にあげるのは、18世紀半ばにブルゴーニュのオセールに近い教区ベンヌの司祭のしたためた書簡である。火事で焼け出された人々への施しを他の教区の信者に求める救援要請でもあるが、これは後のセヴィニエ夫人の書簡やレチフの自伝小説の叙述との比較の意味もあり、最初にとりあげておく。この司祭はおそらく火事の知らせを受けた後、現地にも赴いて、その火事の現場とその結末をその目で見ていたにちがいない。しかし彼はここで、自分が見た火事そのものを詳細に語ることはしない。まずは「9つの建物と家財道具の大部分が」が焼けてしまったという事実を伝え、「火の回りが速く」「いずれの住民も畑仕事に」出ていたという状況から、その被害の大きさを語るとともに、その結果「幼い子どもが二人火傷を負い」、多くの人が「焼け出された」と言う事実を継起的に淡々と伝えているだけである。判断や評価に関わる直接的な表現があるとすれば、それは焼け出された人々が「破滅的な境遇に追いやられている」という箇所だけである。しかしどのように「破滅的」なのかは語られない。もちろん9つもの家屋が家財道具も焼けてしまうほど焼けているのである。逃げ遅れたと思われる幼い子が火傷も負っている、これだけでも十分事態の深刻さは伝わってくるが、詳細はわからない。字数をきりつめて重要な情報だけをもりこんだ新聞報道のような印象を受ける。

しかしおそらくこの時代の農村の集落の「火事」を経験したことのある人間には、多くを語るまでもなく、これだけ読んだだけでも十分にどのような状況であったかが目に浮かび、想像されたにちがいない。またこの文章は、ここで火事が起きたことをまだ知らない、遠くにいる人々に、急いで知らせるために書かれた「証明書」でもある。事態の深刻さを見てとった司祭が、火事から4日後とは言え、できるだけ早く救援を要請しなければならないと判断し、その任務をはたすべくおもむろにとりあげたペンによって、とるものもとりあえず、急いでしたためたものであるとも考えられる。だとすれば、この「簡素さ」「簡潔さ」にこそ、まさにその「緊急性」も現れているとみなすことができるだろう。

しかしながら、この叙述の特徴の一つは、司祭の抱いたであろう感情について一切語られていないところにある。また火事にしろ、その被害にしろ、その詳細はほとんど記されていない。内容は、読む者の理解力、あるいは想像力に委ねられている。そのため、この叙述を読んでも、当時の火事の恐ろしさを知らない人間には、にわかにはその深刻さや重みが伝わらない。火事に遭遇した人間の驚きや恐怖、落胆や失望、叫びや嘆きが、この叙述からリアルに現前することはない。実際のところ、これは任務を着実に果たそうとした司祭の型通りの文章であり、それ以上でもそれ以下でもないようにみえる。そのことは、もちろんただちにこの司祭が怠惰であったとか、鈍感であったことを意味しない。しかしこの司祭が、この火事からどのような感情を抱いていたかは、この文章からはほとんど推し量ることができない。ましてや書き手である司祭がこの教区民とどのような関係を日ごろもっていたか、どのように感じ考える個人としてあったかは、まったくわからない。

(2) セヴィニエ夫人の書簡より

次にとりあげるのは「セヴィニエ夫人の書簡」である。これはベンヌの司祭の書簡とは対照的な性格を有する。セヴィニエ夫人は、7歳で孤児となり、母方の祖父母の家に育てられるが、恵まれた環境で育ち、読み書きはもとより、イタリア語を解し、当時の最先端の文芸や文化に通じていた才媛であった。成人してブルターニュの名家に嫁ぐが、7年後に夫はその愛人を巡る決闘であっけなく亡くなり、寡婦となる。その後は二人の遺児の養育に専念し、生涯再婚することはなかった。その後、40代になってからであるが、夫人は嫁いだ娘グリニャン夫人にあてて頻繁に書簡を書くようになる。夫人はパリとブルターニュの領地を往復し、しばしば娘の嫁ぎ先のエクスにも足を運んだが、そうでないときは頻繁に娘に手紙を書いて過ごした。残されている書簡だけでも、1500余通に上る。これらの書簡は、その文章の巧みさのゆえに書き写され、とくに1673年以降は、宮廷やサロンでも多くの人々に回覧されるようになっていた。死後もそれらの書簡の写しは一人歩きし、30年たった1725年にはついにその手書きの書簡が孫娘によって

出版される。それ以降は、セヴィニエ夫人の書簡は、活字本となったことでよりいっそう広く読者を得て、国境を超えて流布していくことになった。事実、18世紀のうちにすでに英仏の作文教育のお手本と見なされ、やがてこの世紀の書簡体小説の成立にも多大な影響を及ぼしていった。

書簡が書かれた当初、夫人は自分の手紙が後に活字となって出版されるとは予想していなかった。しかし彼女の文章は家族や親族のみならず、宮廷やサロンでも評判となり、生前から写しが出回り広く読まれてもいたから、彼女もそのことを知っていて、書いているときからすでに読者がいることを意識していたにちがいない。彼女の火事を伝える叙述は、遠くにいる誰かに自分の見た火事を伝えようとする点では、ベンヌの司祭と同じ位相のもとにある。しかしその両者の叙述の様態には、およそ似ても似つかない大きな隔たりがある。ベンヌの司祭の書簡に先立つこと80年の叙述である。「ロゴスをもつ人間」の「話し」「伝える」様態において、この両者の間にはいかなる差異があったのか、またオーラルとエクリの関わりを考えると、彼女の書簡の中では、いったいどのようなことが生じていたのだろうか。

火事に関する叙述は、1671年2月20日金曜日のグリニャン夫人あての手紙に現れる³⁰⁾。その冒頭は、いつもながらの夜半の日常を語るどころから説き起こされ、以下のように始まる。

……実はね、可愛い人よ。一昨日の夜、水曜日、いつもわたしたちが郵便の包みをこしらえますクーランジュ殿の許から帰ってきて、寝ましようと思ったときでした。それだけなら何もたいして変わったことではないのです。ところがただならぬことには、このとき、夜中の三時に、泥棒だ、火事だ、と叫ぶ声を聞いたのです。しかもそうした叫びがごく身近で、立て続けに激しく聞こえてくるものですから、きっとこの家に違いないと思いました。わたしの可哀そうな孫のことを話している声が聞こえるような気さえました。きっと焼け死んだのだと思いました。

...Vous saurez, ma petite, qu'avant-hier, mercredi, apres être revenue de chez M. Coulanges, ou nous faisons nos paquets les jours d'ordinaire, je reviens me coucher; cela n'est pas extraordinaire. Mais ce qui l'est beaucoup, c'est qu'à trois heures après minuit, j'entendis crier au voleur, au feu, et ces cris si près de moi et si redoublés que je ne doutai point que ce ne fût ici. Je crus même entendre qu'on parlait de ma petite-fille; je ne doutai pas qu'elle ne fût brûlée.

「実はね、可愛い人よ」で始まるこの叙述は、娘に対しても tu ではなく vous を使って書かれており、丁寧な書き方になっている。しかしそれは彼女が侯爵夫人という当時の身分制社会の中では高位に位置する貴族のさらにその上位階層にあったことからくる習

慣でもあり、vous を使っているからといってことさらに改まった表現をしているわけではない。おそらく娘が目の前にいたとしてもそうであったように、普段とかわらず親密に語りかけていると考えられる。こうした語りかけは、文字によって不在の誰かに何かを「伝える」という一方的な営みではあるが、その叙述は、いまこの目の前に娘がいたならそうしたように、面前で話しているかのように書かれている。つまりセヴィニエ夫人の書簡は、あくまでエクリではあるが、「話すように書く」ところに特徴がある。読み手である娘は、おそらくこの書簡から母の声を聞いていたであろう。夫人は不在の娘に、書くことを通じて語りかけ、対話していたのである。彼女は週に何度も手紙を書き、娘からの手紙が滞ると落ち着かず、手紙が届かないことを伝える手紙をまた書くというほどに、娘との書簡による応酬を楽しみにしていた。

しかし、このこと自体は特に珍しいことではない。母と娘という親密な間柄に交わされる書簡である以上、ありうることだからである。セヴィニエ夫人の叙述の大きな特徴は、それとは別のところにある。まず、この部分は、郵便の包みをこしらえるクーランジュ氏のところから戻って寝ようとしたという事実から始まり、出来事はその時間の経緯に沿って綴られていく。ここには時間の推移が確実に意識されているのである。その際、特筆すべきことは、ただ見たことや起きたことを時間の順に書いていくのではなく、「それだけなら何もないして変わったことではないのです」とそこにある種の評価を与えつつ、自分自身の判断を織り込んでいくところにある。それはその直後にやってくる「ところがただならぬことには」という場面の転換との対比を予想してのことでもあり、そうした日常的なありふれた時空が、ある異変によって突如として破られ、別の次元へと移っていくさまを、この対比によってはっきりと示し、めりはりのある推移として描写していくのである。それはある種、演劇的なシーンの展開にも似ており、物語の始まりにふさわしい展開である。

そして興味深いのは、その異変を伝えるのに、彼女は自分自身がそのとき感じ取っていたことを書いていく点にある。その持っていく方は実に巧みである。というのも「ただならぬことに」と言ったその直後に、まずは「夜中の3時に、泥棒だ、火事だと叫ぶ声がした」と述べ、火事が起きていたとはすぐには明かさないからである。何者かの声が聞こえ、それが激しく繰り返されるがゆえに、未確認のまま彼女が自分の家が燃えているのではないかと思ひ込む。同時に孫娘のことが脳裏をよぎり、幻聴のように孫娘のことを話す声が聞こえたとも語り、それによって瞬時に孫娘が焼け死んでしまったのではないかと妄想し、恐怖したことまでが、縷々語られていくのである。実際に燃えていたのは隣のギト一家の屋敷であることがあとで明らかになるのであるが、彼女がその瞬間に抱いた不安と恐怖は、どうでもよいことではなく、それ自体が重要な出来事なのである。それが何者かの「声」に翻弄された思い違いによるものだとしても、そのことを綴ることによって、彼女は自分自身の姿と自分自身の内部で起きていたことを表出し描

き出しているのである。しかし、それによってこの火事がいかに近くで起きていたか、そしていかに真夜中突如として起こり、彼女の周囲が混乱に陥れられたかが、リアルに再現されているのである。こうしてある種の臨場感さえ呼び起こしながら、物語は進んでいく。

これは、言ってみれば落語家や講談師などの語り部の語り方にも似ている。読む者に「え、それで？」とその後どうなっていくのかと問いを誘いながら、演劇的と言ってもよい手順で話が展開していくのである。つまり彼女はここで語り部となって読者を誘導し、自らの「出来事」へと巧みに誘い込んでいくのである。

渦中であって自身が感じていたことを、まるで演劇のように物語ってみせること、これは明らかに読者を意識した叙述であり、読者にも彼女の感じたこと、見たことを共有させようとする叙述でもある。読者はその感情世界とともに彼女の世界を見せられ、惹きよせられていくのである。これは「何月何日何時ごろにわたしの教区で火事がおきまして……」という事実だけを伝える伝達とは全くことなる。これは書き手自身がその瞬間を共有し、その出来事の内部であって、感じ考えていたことをこそ継起的に叙述していくやり方であり、ペヌの司祭の伝達との差異は一目瞭然である。ペヌの司祭の叙述からは、司祭自身がどの位置からその火事を体験したのか、見たのかは全くわからない。しかしセヴィニエ夫人は、この出来事の中で自分がどこにいて、どのようにしてこの出来事を知り、またこの出来事から何を感じ考えながら、どのように動かされていったのかを、つまり対象と自分との関わりや位置関係を時間の中で、その驚きや戦慄そして彼女の感じ考えるその仕方、判断とともに、描写していくのである。

さらにその続きを読んでみよう。

そうした恐れに、暗がりの中で、立ち上がりましたが、ふらふらとほとんど足が利きません。やっと孫の部屋にかけつけました。例のあなたのお部屋です。見ればなんのこともなく静まり返っています。しかしギトー様の家の燃え上がっているのが目に入りました。

Je me levai dans cette crainte, sans lumière, avec un tremblement qui m'empêchait quasi de me soutenir. Je courus à son appartement qui est le vôtre; je trouvai tout dans une grande tranquillité. Mais je vis la maison de Guitaut toute en feu;

邦訳初版は1943年と戦前ながら、井上究一郎氏によるその見事な訳文に付け加えることは何もない³¹⁾。とりわけこの「ふらふらとほとんど足が利きません」は、*avec un tremblement qui m'empêchait quasi de me soutenir* の訳であるが、恐怖によって足元がふらつくさまをオノマトペを用いることで的確に表現している。これぞ妙訳と思われるが、それはともかく、セヴィニエ夫人の叙述の特徴の一つは、出来事を語るのに、それが自ら

の身体に生じていたこととして開陳されていくところにある。この出来事はももとは彼女の外側に起きていたことであるが、彼女の五感を通して、彼女の内側の出来事となり、内部と外部の境に、その識閥に浮かび上がってくるのである。

さらにその先を読んでみよう。

……焰がヴォヴィヌー夫人の家の上に移ろうとしています。家々の中庭がぱっと明るく、とくにギトー様の家は、ぞっとするような明るさです。それは人々の叫喚でした、ごった返しでした。焼け落ちる桁、梁の恐ろしい響きでした。

...les flammes passaient par-dessus la maison de Mme Vauvineux. On voyait dans nos cours, et surtout chez M. de Guitaut, une clarté qui faisait horreur. C'étaient des cris, c'était une confusion, c'étaient des bruits épouvantables, des poutres et de solives qui tombaient.

「焰 flammes」がさらにその隣家に「燃え移ろうとしている」さま、彼女がまず記したのはこの光景である。それはおそらくこのことが当時の火事における最も不吉な光景であったからでもあるだろう。当時の火事で何が恐ろしいかといえば、焰が建物を一つ燃え尽くすだけではとどまらないということである。ベンヌの司祭の書簡にもあったように、農村の集落では、最終的に9軒の家屋が焼き尽くされている。いったん火事が起これば、隣接する家屋には必ず火の子や焰が飛び移り、やがて隣家も燃えあがる。数件離れていたとしても、目の前で見ている火事は風向き次第では自分の屋敷にもいずれ及んでくるだろう。そのことを誰もが知っていて、予感したにちがいない。彼女がまずそのことを書いているのも、単にそれが最初に目に入ったというだけではなく、当時の誰もが恐れた火事の本質でもあったからである。

しかしここで注目すべきは、その次に書かれた短い数行である、彼女はその瞬間に自分の目に飛び込んできたものと耳に聞こえてきたものとを、順々に描き出している。「ぞっとするような明るさ」は視覚に関わる表現であるが、「明るさ clarté」とは、暗闇中の「たいまつ」や「日の光」など目を奪われるような圧倒的な明度をもつ光をさす。そしてその次に来るのは、耳がとらえたものである。それは「叫び声 cris」であり、「ごったがえし confusion」であり、「焼け落ちる音 bruits」である。ここは、この3つを一度に列記することもできたはずであるが、セヴィニエ夫人はそれをわざわざ三つに分けて、別々に言い直して浮かび上がらせていく。

つまり c'était ～～と、過去における継続を意味する半過去形を用い、それぞれの語を三度分節して繰り返しているのである。「それらは～と～と～でした」とただ列記することもできたはずであるが、「それは～でした、それは～でした、それは～でした」と3度畳み掛けることで、その音や声は消えずに残り、積み重なり、増幅され、光景が音響とともに目に届けられていく。耳や目が受け止めるべきものはここで頂点に達し、眼前に

音をたてて燃えている火事場の騒然たる光景が広がる。これは、音楽で言えば、クレッシェンド・フォルテに相当する漸次的強調の表現である。それはまた閃光するフラッシュのようでもあり、まるで映画のシーンのように繰り返される。それによって読者の五感にも訴える音と映像の重なりが身体全体に触れてくるのである。これは単に事態を「伝える」ものではない。いままさにここにその光景を再現し現前させてみせる技でもある。しかし語る主体はあくまで冷静である。Quel～というような直接話法の感嘆表現は使われていない。冷静に再現される叙述であるがゆえにこうした語りはいっそう読者の理性に訴え錯覚を呼び起こしていく。読者はいつの間にか暗闇の中からその中庭の「ぞっとするような」空間に引き出され、まるで白日のもとで火事を見ている気になるのである。

もう一つ触れておかなければならないことは、彼女の読書との関わりである。かなりの読書家であったことは知られているが、同時に当時人気を博していたラシーヌだとかコルネイユといったパリの演劇にも精通しており、同時代の出版や娯楽を享受し、ココアという新奇な嗜好品にも一家言をもっていた。この火事の叙述でも、彼女は、次のようなくだりの中で、コルネイユの演劇で用いられていた言葉を引用している。

……火の手は、慈善に満ちた手練に長けたカプチン僧団の方々が、たいへんよく活躍して、遮って下さいました。みんなして余燼の上に水をかけましたが、結局のところ、**戦闘は戦闘員の不足に終わりました**³²⁾。というもすでに客間の右手にあたる二階と三階の控えの間と小部屋と私室とが全焼してしまっていたのです。

*...Des capcins, pleins de charité et d'adresse, travaillèrent si bien que'ils coupèrent le feu. On jeta de l'eau sur les restes de l'embarrasement, et enfin **La combat finit faute de combattants** c'est-à-dire après que le premier et second étage de l'antichambre et de la petite chambre et du cabinet, qui sont à main droite du salon, eurent été entièrement consommés.*

[下線および太字は長谷川による強調]

この当時、消防団はまだなかったため、こうした火事に際しての火消しには、宗教教団や慈善団体が救援に入っていた。ここでもカプチン会の僧侶たちがやってきて火の広がりを食い止めようとしていることがわかる。しかし、いかんせん人数が足りず、うまくいかなかったことを彼女は伝えている。そのことを言うのに、彼女は、「戦闘は戦闘員の不足に終わりました」と述べて、演劇で聞いたことのあるセリフを、つまり気の利いたセリフを思い出して挿入しているのである。この斜体の部分は、古典悲劇を確立したコルネイユの不朽の名作『ル・シッド』(1637, IV, III)に出てくる有名なフレーズを念頭に置いたものである。

ただし「終わった」と言うのに彼女は finit (動詞 finir の単純過去形) を用いている。コルネイユが出版した原本によれば、ここは cessea (動詞 cesser の単純過去形) が用いられ

ている³³⁾。彼女はこうしたセリフを書物から一字一句たがわず確かめて引用していたのではなく、記憶を頼りに引用していた可能性があり、あるいはまた舞台上で演じた役者が実際に用いたセリフを耳で記憶していて、それをここに書き込んだ可能性もある。演劇は長らく出版からは無縁であったが、この時期にはモリエールを初め、シナリオそれ自体が出版され始めていた。³⁴⁾だから、彼女がこのセリフの書かれている書物を手にして目で読んでいたことも考えられる。しかしセヴィニエ夫人はこの書簡を書くために文献をわざわざ確かめてそれに忠実であろうとしたわけではない。少なくともそのことにそれほど価値を見いだしてはいなかっただろう。むしろ彼女は、コルネイユのももとのフレーズが *cessea* となっていたことを重々承知の上で、あえてより日常的に用いられている *finit* という見慣れた動詞にずらしてみせることで、外部にある表現をわが物とし、自らの言葉として自由に改変し使いこなしているさまを、さりげなく読者に指し示していたとさえ考えられるのである。言葉を駆使できること、新しい日常にない新奇な表現や言葉を楽しむこと、セヴィニエ夫人の叙述はそうした彼女のエスプリの宝庫でもある。

最後に、紙幅の都合もあり十分な考察は別の機会に譲るが、もうひとつだけこのセヴィニエ夫人の火事を語る語りの特徴の見るべき点をあげておくと、次の叙述にも表れているように、こうした深刻な事態を自分に起きた出来事として語りながらも、一方で彼女はこうした事態を書いている時点で振り返り、客観化しつつ笑っていることである。

……しかしあんな悲しい場合にも笑うことができたとすれば、そのときの私たちみんなの格好です。あれを絵にしたら、どんな好き勝手な姿が描けたことでしょうか！ ギトー様は寝衣のままズボンをおはきになり、ギトー夫人は脚をお出しになって部屋靴を片方失くしておいででした。ヴォヴィヌー夫人は部屋着なしの短いスカート姿でした。従僕たちやご近所の殿方もみなナイト・キャップのまま。大使様は部屋着に髭をおつけになり、いと高きヴェニス政府の尊厳をたいそう立派に保たれました。ところがその秘書官といたらお見事でした。あなたならヘラクレスのようなお胸だとおっしゃることでしょう。全くもって、それは別あつらえなのです。丸見えになっているのが、白くて、肥って、むっくり盛り上がって、とにかく全然肌にはなにもつけておいでにならないのですからね、というのも寝衣を結び付けていたはずの紐が戦闘中に飛んでいってしまったのです。これが私達の界限の悲しいお知らせです。

...Mais si on avait pu rire dans une si triste occasion, quels portraits n'aurait-on point faits de l'état où nous étions tous? Guiteau était nu enchemise, avec des chausses. Mme de Guitau était nu-jambes, et avait perdu une de ses mules de chambre. Mme de Vauvineux était en petite jupe, sans robe de chambre. Tous les valets, tous les voisins, en bonnets de nuit. L'Ambassadeur était en robe de chambre et en perruque, et conserva fort bien la gravité de la Sérénissime.

Mais son secrétaire était admirable. Vous parlez de la poitrine d'Hercule! vraiment, celle-ci était bien autre chose. On la voyait tout entière; elle est blanche, grasse, potelée, et surtout sans aucune chemise, car le cordon qui la devrait attacher avait été perdu à la bataille. Voilà les tristes nouvelles de notre quartier.

これほどの事態に遭遇しながらも、ある種ラブレー的な世界を彼女はここに見てとっている。悲劇と喜劇とが同居する不思議な間、それは決して嘲り笑うシニカルなものではないし、かといって憐れみ同情するだけのものでもない。他の部分の叙述と同様、ここでも彼女は、思わず笑う自分、笑うことのできる自分を見せ、描き出しているのであり、書くことを通じて、外部に起きている出来事を自らの内部に起きている感情世界として表出しているのである。それは「こと」に触れ自分の心に浮かぶことを書くことによって、世界を主体となって把握し、「知ること、体験すること connaître」である。つまり自らが己の五感でもって体験し、認識し、理解可能なものにすることである。これは自身の内部におきていることを表出するという点では、先にあげたウルスラ会修道女の受肉のマリの自己省察とも共通するものがある。しかし、セヴィニエ夫人の場合は、そこに神を介在させることはない。自己と超越的な神との対話ではなく、自己と他者、あるいは自己の内部と外部との境界にあって、その間に生じている出来事を表出していくのであり、その叙述は自己と外部との対話に貫かれている。

以上みてきたように、セヴィニエ夫人の書簡の叙述は、とくにこの1671年2月20日付の書簡に関しては、書かれた時点ではたしかに現実の娘に宛ててしたためられた「私」の書簡であった。しかし演劇史の泰斗クリスチャン・ビエも指摘しているように、彼女は書簡を書くときにそれが娘だけでなく、より多くの読者に読まれることをはっきりと意識していた。少なくとも読者がいることを想定しており、とくに1673年以降は「作家」である自分を密かに愛してもいたにちがいない³⁵⁾。自己愛と自尊心を包み隠さず表し叙述を紡ぐことで、彼女は自己を定立し、世界をまさに領有していくことを楽しんでもいた。それはまた、オーラルとエクリの間に創造されていく新しい叙述であり、エクリに触れ、一方では自らの心のおののきをみつめ、文字という伝達手段を使って、瞬間瞬間を再現可能な物語として創造し、他者の脳裏に運ぶことでもあった。彼女にとって「書くこと」は、あたかも話すかのように、声や息遣い、身体そのものを構築する営みであり、文字を通じて世界を創造し、他者を彼女の叙述世界に引き込んでいく営みでもあった。「個人の語り」はこうして外部との接触を糧に、個人の内部の出来事を表出するとともにその外部へと発信する「書くこと」の位置を鮮明にしていくだろう。

(3) レチフの自伝小説より

さて、最後になったが、18世紀後半に農民から作家になったレチフの描く火事の叙述

をあげておきたい。レチフ・ド・ラ・ブルトンス (1734-1802) は、ブルゴーニュの小都市ヴェルモントンに近いサシ Sacy 村の豪農の息子であったが、13歳の時に教育のために近隣のクルジ村の叔父の家に預けられ、1747年から1751年までそこに過ごしている。その後オセールに出て、印刷屋フルニエで植字工の見習いとなるが、やがて印刷屋に職を得てパリに出る。放蕩三昧した後、30歳を過ぎてから作家を志し、ベストセラー作家となる。以下に示すのは、レチフの自伝小説と言われる『ニコラ氏』(1788-94)にある1749年10月22日のクルジでの火事の光景である³⁶⁾。読んでみよう。

……3軒の家がすでに炎上していて、風によって運ばれた藁ぶき屋根が、村全体に火の粉をまき散らしていました。……トマ神父が助けを求めて叫んで、司祭に通報し、早鐘を鳴らして男たちを集めさせましたが、クルジには水というものが乏しいので、男たちに家をひとつ取り壊して他から切り離すよう促し、火を断ち切らせようとなりました……。おのおのが持ち出せるものは持ち出そうと急いでわが家に向かっていました。それはわたしが生きているうちに見た最も恐ろしい光景でした。149軒の家がそこにあった収穫とともに一度に燃えていたのです。大量の煙が出てきて太陽を蔽い隠し……村の四分の三が焼き尽くされました……司祭館と教会を除くと、プレイ門に隣接している小さな街区以外に火事を免れたものはありません。小麦の収穫は全部そっくり灰と化し、葡萄酒も失われ、樽は押しつぶされアーチ型になって埋まり、燻ぶっていました。夕方にならなければ炎の拡大を抑えることができなかつたのです。水がありませんから、炎を消すことができず、梁は3日以上も燃えていました。

(長谷川まゆ帆 訳)

“...Trois maisons étaient déjà embrasées et les toits de chaume, emportés par le vent, jetaient sur tout le bourg des gerbes de feu.... L'abbé Thomas crie au secours, avertit le curé, fait sonner le tocsin, rassemble des hommes, et, comme l'eau est rare à Courgis, il les engage à couper le feu en abattant une maison isolée.... Chacun se hâta d'aller chez lui pour sauver ce qu'il pourrait. C'était le plus horrible spectacle que j'aie vu de ma vie. Cent quarante-neuf maisons, qui brûlaient à la fois avec leurs récoltes, formaient une masse de fumée qui voilait le soleil.... Les trois quarts du bourg furent consumés..., le presbytère et l'église exceptés, il n'y eut d'épargné que le petit quartier qui avoisine la porte de Préhy. La récolte entière du blé fut réduite en cendres, le vin même fut perdu, les tonneaux ayant été écrasés, ou ensevelis sous les voûtes, ou enfumés. On ne fut maître du progrès des flammes que le soir. Les poutres brûlèrent plus de trois jours sans qu'on pût les éteindre, faute d'eau”.

(Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, éd., Pléiade, tome I, p. 269).

いまやセヴィニエ夫人の叙述を検討した後で、このレチフの叙述を眺めてみると、比

較によってわかることがさまざまある。これは私信ではなく小説ではあるが、自伝小説という性格もあり、ほんとうにあったこと、見たことが一人称で語られており、自分の過去を後の時点から振り返って描いているという点で、セヴィニエ夫人の語りと共通するものがある。語りかける相手はセヴィニエ夫人のように特定の個人にではないとしても、誰かに語ることが想定されているのである。また不特定多数の人に読まれることをすでに意識していたという点でも、セヴィニエ夫人とレチフとはその「作家」性において共通したものがある。

実際、ここでもただ「火事が起きた」というのではない。神父が助けをもとめて「叫んだ」声や司祭が鳴らした早鐘があたり一帯に鳴り響いているその音が描かれている。また、「風によって運ばれた藁ぶき屋根が、村全体に火の粉をまき散らして」次々と家々を炎上させていく、その動いていく光景、男たちが司祭の指示で「家をひとつ取り壊して他から切り離し」「火を断ち切ろうと」奮闘するも断念させられていくその人間の動き、少しでも家財をもち出そうと走る人々の姿が、こうした時間の推移とともに次々目に入って来る。そして最後には149軒もの家が焼き尽くされ、収穫の小麦、葡萄、樽が灰となり、太陽を蔽い尽くすほど大量の煙が出て、3日にわたって梁が燃え続けたことが述べられ、それらがまさに声や音、光や闇を伴う人間の動きや光景として読者の眼前に広がっていくのである。

読者はこの叙述から、まるで今そこでこの火事を見ているような錯覚を起こす。クルジなど少しも知らなくとも、その村がどれほどの規模であり、また水がないという限界の中で、人々の懸命な消火活動にもかかわらず、集落全体が火事に翻弄され、敗北していくさまが読む者の脳裏に焼き付けられていくのである。これは最初にあげたベンヌの小教区司祭の「証明書」とはおよそ異なる叙述であり、まるで映画でもみているような映像的な描写である。この点でこのレチフの叙述は明らかにセヴィニエ夫人のそれに近い。

では語り手の位置や心情の描写の仕方においてはどうか。レチフの描く火事には「それはわたしが生きていうちに見た最も恐ろしい光景でした」とあり、その外部の出来事をどのように受け止めたかが書き込まれている。とはいえその表現はある意味では凡庸であり、ありきたりな「恐ろしい光景」という一般的な表現である。セヴィニエ夫人ならば「ふらふらとほとんど足が利きません」というように自らの身体に起きている出来事を語ることを通じてその「恐ろしさ」を現前させていくだろう。そこがレチフとセヴィニエ夫人の微妙なしかし決定的な違いであるようにも思われる。外部の出来事を内部の出来事として描くのがセヴィニエ夫人の叙述であるならば、レチフはあくまで出来事の外部に自分をおき、出来事を外部から眺めるだけである。描写がどんなに細かく映像的でも、それは感情や心情、身体側の応答から切り離されたルポルタージュに近い。書き手自身のおののきや息遣い、身体への反応はここには何一つ描かれていないのである。

では、そうした違いはどこからやってくるのか。単純に、語り手の語る時点での出来

事からの時間的隔たりの遠近によるのか、出来事に対して語り手がどういう距離をもっているか、つまり当事者であるか、そうでないかという違いによるのか、あるいはまた小説家という虚構を前提にした叙述とほんとうに起きたことを語る叙述の違いによるのか。レチフの小説が出版されたのは、セヴィニエ夫人の書簡が出版されてから70年近くを経た後のことである。レチフが書籍となった『セヴィニエ夫人の書簡』にも目を通していた可能性は十分にある。しかし両者の叙述を比較してみると、セヴィニエ夫人の叙述の方がはるかに心情を伴う「個人の語り」のように見えるし、文学的な技巧にも長けているように見える。しかしレチフの叙述もベヌヌの司祭の書簡と比較すれば、その「伝え方」においての違いは明瞭であり、洗練された豊かな表現力をもち得ていることは明らかである。これは単純に歳月や時間の問題ではないだろう。エクリとの出会いとその受容のあり方に関わっている。そして書き手の中にどのようなオーラルな世界があり、またどのようなエクリと出会っているかによる差異でもあるだろう。レチフ自身が印刷職人としてあるいは小説家としておそらくは多様な書物を通じて受け取っていたものが何であるかを知ることは容易ではない。それはまたメノッキの脳内の化学反応を精査するのがむずかしいのと同じくらいに解読不能でもある。しかし、レチフの脳もまたメノッキオの脳と同様にオーラルとエクリの間^{あわい}にあって、その接合の中で叙述が紡ぎだされていたことはまちがいない。

最後に

近世期と一口に言っても、エラスムスの生きた15世紀末から16世紀前半、メノッキオの生きた16世紀半ばから後半、セヴィニエ夫人が生きた17世紀半ばから後半、そしてレチフが生きた18世紀半ばから後半とでは、「個人の語り」のあり方は同じではない。そのちがいは単純な発達とか進化の過程としては語りえない。しかしひとつだけ共通して言えるのであれば、それはこの時代を通じてオーラルとエクリが互いに境を接し、影響を及ぼしあっていたことであり、人間の「話し」「伝える」その仕方の可能性を押し広げ、変容させていったことである。本稿はそうした近世期の変化のほんのわずかな痕跡を垣間見たにすぎないが、それらは「話す(=ロゴスをもつ)動物」の重要な変化の一端をさし示している。現代はこの時代の延長上にある。そしていまなお「個人の語り」が世界を開示し、それがときに「爆発性の」「危険な」混合物となりうる可能性をもちうるとすれば、それはロゴスをもつ人間が、オーラルとエクリの出会うその間^{あわい}に生きているからである。わたしたちが知りたいのは、このオーラルとエクリの境界に、あるいは内部と外部の識閥に立ちあがる意味生成の過程であり、ロゴスをもつ生き物が、その身体とエクリとの、とりわけ印刷された頁との間に知らず知らずのうちに介在させていく解読格子である。

注

- 1) 本稿は、第62回日本西洋史学会(2012年5月19-20日明治学院大学)2日目の小シンポジウム「語りのかたち——パーソナル・ナラティブの歴史学——」において行った長谷川の報告草稿「オーラルとエクリの間——近世期ヨーロッパの事例から——」をもとに、加筆訂正したものである。小シンポ全体の要約は『西洋史学』(2013年号)に掲載される予定である。
- 2) アリストテレスの文章で人間の特質を言語能力にみようとすする記述は、『政治学』(1253a)や『修辞学』(1355b2)などの中にあり、たとえば‘*man alone of the animals has logos*’つまり「動物の中で人間だけがロゴスをもつ」と記されている。Berns, Laurence, “Rational Animal-Political Animal: Nature and Convention in Human Speech and Politics”, *The Review of Politics*, 38-2, 1976, p. 177. アリストテレスのロゴスに関する記述については、シンポジウムの報告草稿の準備段階で、古代ギリシャ史研究者の上野慎也氏から文献上の詳細なご紹介をいただくことができた。記して感謝を申し上げたい。
- 3) 小野光代、「16世紀ドイツの Flugschrift における語・句の重ねについて：言語平衡論との関連において」(『研究論集』関西外国語大学、83巻、2006年)、144頁によると、ドイツ語の Flugschrift は、日本で邦訳されてきた歴史書、宗教改革関係の書物では「パンフレット」と訳されてきたが、これは、当初、単に小冊子 Büchlein とか、回状 Sendbrief などと呼ばれていた印刷物が、後のとりわけ書物史研究の中で、綴じられていない紙葉から成り立っている小冊子をさす総称として用いられるようになった用語であり、これをパンフレットと訳すのは適切ではないという。小野さんの論稿で興味深いのは、一つの語がいくつかの言葉に言い換えられて重ねて表記されているこの時期の Flugschrift について、それが従来考えられてきたような単なる言葉遊びではなく、いわゆる標準ドイツ語をまだ有していなかった当時のドイツ語圏の様々な地域でそれが読まれることを想定して、それぞれの地域の言葉でわかるように複数の地方語に言い換えて語を重ねて記していたからであると指摘されている点である。こうした印刷物は当時、黙読のみならず、大勢の中で声に出して読まれていた可能性が高い。
- 4) 本稿執筆中に村松眞理子さん(イタリア文学)からのお誘いによりフィリポ・デ・ヴィーヴォ Philippo de Vivo 氏(ロンドン大学、ルネサンス史)による講演「ヴェネチア・ルネサンス：印刷・新聞・広場の声」(2012年11月1日)に触れる機会を得た。(東京大学教養学部新課程/地域文化研究文化教養学科「イタリア地中海コース」開講記念企画。)ヴェニス出版、印刷物に関する歴史を扱ったその研究は、ピータ・バークやロバート・ダーントンの議論とも深く通底していた。講演では、この時期のヴェニスではラテン語ではない出版物も増大し、版を重ねるごとに小型化していったことや、路上で読める者の周りに人だかりができ、手書きのニュースレターが声に出して読まれるのを人々が興味津々に聞いている光景が、当時のデッサンや実物史料の写真とともに紹介されていた。聞けば17世紀初頭のヴェニスの識字率は約30%(男性)と言ひ、同時代のフランスの平均よりは高いが、多くの人々が依然として文字を読めなかった。しかし識字率の低さは必ずしも文字との接触を排除するものではない。Cf. De Vivo, Philippo, *Information and Communication in Venis: Rethinking Early Modern Politics* (Oxford University Press, 2009) 手書きの新聞は、ダーントンが18世紀パリについて示したように、やがて活字となって広まり、再びオーラルとエクリの間に戻って、複雑に循環するであろう。この時代の「読書」は、我々が考えるような「黙読 la lecture silencieuse」ではなく、印刷物もまたこうしたハビツスとともに広がっていったと考えられる。ダーントン、R.『禁じられたベストセラー』(新曜社、2005年)。

- 5) セルトー、Michel de、山田登世子訳、『日常実践のポイエティーク』（国文社、1987年）、273頁。
- 6) Gilmont, Jean-François, *La Réforme et le livre: l'Europe de l'imprimé (1517-v. 1570)*, Les Éditions du Cerf, Paris, 1990, p. 480.
- 7) このフランス語訳は前掲書、p. 481からの引用である。Chrysostome とは、4世紀のコンスタンチノーブルの大司教であり、「黄金の口のヨハネ」と称され、雄弁な説教師として知られていたクリュソストモス(347頃-407)のことであり、Jérôme とは、言うまでもなく、聖書のラテン語訳(ウルガタ聖書)を完成させた著名な教父、聖ヒエロニムス(347頃-419/420)のことである。
- 8) ギンズブルグ、Carlo、杉山光信訳、『チーズとうじ虫——16世紀の粉挽き屋の世界(みずず書房、1984年)。
- 9) 二宮宏之、「フランス絶対王政の統治構造」『全体を見る眼と歴史家たち』(日本エディタースクール、1986年)、125-6頁。
- 10) デーヴィス、Natalie. Z., 成瀬駒男・宮下士朗訳、『古文書の中のフィクション——16世紀フランスの恩赦嘆願の物語——』(平凡社、1990年)
- 11) ダントン、Robert, 海保真夫・鷺見洋一訳、『猫の虐殺』(岩波書店、1986年)、184頁。
- 12) アルザスの事例については以下を参照。長谷川まゆ帆、「権力・産婆・民衆——18世紀後半アルザスの場合——」『思想』(No. 743、1986年)他。なお、ここで触れた係争事件については、現在、ロレーヌなどの事例との比較を通じ、アンシャン・レジーム社会全体との連関の中で論じるモノグラフ『教区の女たちが産婆を選ぶ——近世フランスの社会と身体——』(仮題、東京大学出版会より2013年刊行予定)として出版に向けて準備中である。
- 13) この女性はイエズス会士を「黒衣の者」と呼び、彼らの到来以降、村に次々と死者や病者が出て幸福が奪われていったと述べ、イエズス会士の口にのぼる呪文(祈り)や騒々しい銃の音への強い嫌悪を表明している。「彼女が話すのをやめた時、誰もがそれを本当だと納得いたしました」とマリは締めくくっている。デーヴィス、前掲書、151-152頁。
- 14) ギンズブルグがイタリア語原著で意図的に用いたと思われる *cosmogonia* という語は、英語版では、*cosmogony* ではなく、*univers* と訳されている。そのためか、日本語版でも「宇宙論」と訳されている。しかしイタリア語 *cosmogonia* には「宇宙進化論」「宇宙発生論」という宇宙の誕生と創世の過程を含意する意味があり、*cosmos* (宇宙) や *cosmologie* (世界観) とはニュアンスが異なる。それゆえ、ここではこの単語については原語に近い「宇宙発生論」と訳すことにした。
- 15) これは西洋史学会の小シンポの際にフロアーからいただいた質問にも関わる。それは異端審問の記録を声として利用できるのかという重要な問いであったが、後にその質問者が『声と文字』(岩波書店、2010年)の著者大黒俊二氏(イタリア中世史)であることが判明した。
- 16) Ginzburg, 前掲書。
- 17) Ginzburg, Carlo, *Il formaggio e i vermi: Il cosmo di mugnaio del'500*, Giulio Einaudi editore s.p.a., Torino 1976, p. 61. 本稿では、異端審問の審理の中で記録されたメノッキオの発話内容やその他のギンズブルグの叙述を引用する際には、日本語版以外にイタリア語原版・フランス語訳・英語訳を参照している。原文の引用に際しては、主に原著イタリア語版を使用した。フランス語版: *Le fromage et les vers: L'univers d'un meunier*, Traduit de l'italien par Monique Aymard, Flammarion, 1980; 英語版: *The Cheese and the Worms: The Cosmos of a Sixteenth-Century Miller*, Translated by John and Anne Tedeschi, The John's Hopkins University Press, Baltimore, 1980.
- 18) *Ibid.*

- 19) *Ibid.*
- 20) *Ibid.*, p. 62.
- 21) *Ibid.*, pp. 62–63.
- 22) *Ibid.*, p. 63.
- 23) *Ibid.*
- 24) *Ibid.*, p. 64.
- 25) *Ibid.*
- 26) ギンズブルグ、前掲書、131 頁。
- 27) *Ibid.*, p. 69.
- 28) *Ibid.*, p. 61.
- 29) 原文は手稿文書である。ヨヌヌ県文書館編集の Brocheur 版にもその写真版が掲載されているが活字にはなっていない。Archives départementales de Yonne, G1628, *Service Educatif, Brocheur*, No 17, ADY, 1994, P. 16. それゆえここでは長谷川が原文を読み取り活字に起こしそれに和訳を添えている。ちなみにこの小教区司祭の文章中「いずれの住人も」に相当する箇所の綴りは *tous les habitants* となっている。現代フランス語の表記に従えば *tous les habitants* となるところであるがこれは誤字ではない。この時代には男性複数形を *tous* と綴ることがありえたからである。同様に *être* の半過去形の三人称複数形 *étaient* が、*étoient* となっているのも当時の一般的な表記法に基づくものである。
- 30) マダム・ド・セヴィニエ、(井上究一郎訳)『セヴィニエ夫人手紙抄』(岩波文庫、1943 年)。80–85 頁より。原文は、以下の Pléiade 版から抜粋。Madame de Sévigné, *Correspondance*, Tome I (1972), Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, pp. 163–166. 以下同様。
- 31) 実際には、岩波文庫の井上訳は旧漢字や旧かな使いで訳されているため、本稿ではそれを現代の表記に置き換えている。また、若干ではあるが、原文と照合して、訳し直している部分もある。
- 32) この『ル・シッド』からの引用文は、Pléiade 版では改行して強調されている。おそらく手稿の元の配置に合わせてのことであろうが、本稿での引用に際してはそのまま改行せず続け、代わりに太字にし下線を付している。
- 33) この指摘は Pléiade 版の註記による。finir も cesser もここでは自動詞として用いられている。
- 34) 長谷川まゆ帆「書物から身体への接近——モリエールの喜劇より——」『史料学入門』岩波テキストブック、東京大学教養学部歴史学部会編 (岩波書店、2006 年)。
- 35) Biet, Christian, «L'orale et l'écrit», *Histoire de la France littéraire*, Tome 2 *Classicismes: XVII^e–XVIII^e siècles*, dirigé par Jean-Charles Darmon et Michel Delon, (sous la direction de Prigent Michel), Quadrige / PUF, 2006, p. 409.
- 36) Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, éd. Pléiade, tome I, p. 269. レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ニコラ氏』(1788–94) の 1749 年 10 月 22 日の光景。ちなみに、ダーントンによれば、18 世紀のフランス文学はすべて都市社会の産物であり、当時の文壇は農民に対して門戸を閉ざしていたと言う。パリにいる地方出身の作家の背景を調べても農民的な要素はほとんど見られず、レチフのように農民出身で作家になった者はこの時代にはなお例外中の例外であった。ダーントン、前掲書 (1986 年)、192 頁。